

NORIKO ISHIZAKA

IMPACT CREATOR



57

56



社会になくはない
素晴らしい仕事

石坂典子



2012年

考える社会になってほしい

社会の無関心を変えたい

父が創業した石坂産業に入社したのは20歳の時。当初は、夢だったネイルサロンを開くための軍資金を稼ぐのが目的でした。会社には廃棄物を積んだトラックが毎日たくさんやってきます。私たちは荷物の査定をした後受け入れ、減量化・再資源化をするのが仕事です。事務のお手伝いをしながら営業も兼務していたのですが、そこで取引業者さんによく言われていたのが「料金を下げよう」ということ。彼らは建築物の解体業者さんなどと契約し、石坂産業まで廃棄物を運んでくると中間の業者さんです。「うちはたくさん量を出すんだから、利益でるでしょ？」と。

なぜ中間の業者さんが値段を下げたかという点、ゴミを出

私たちの事業の本質を知ってほしい

消費者も業者も、廃棄物を処理するのにこんなに手間とお金がかかるなんて知らないから。実際、廃棄物を破砕・分別するのは大変な仕事です。誰も好き好んでやりたいた仕事ではない。私も小さいころに「ゴミ屋の娘」とはやし立てられたことがあります。でも、私たちが住みやすい環境、豊かな環境を得るためには絶対に必要な仕事なのです。

どうか適正コストを求めている。社会の無関心を変えたいと、働きながらずっと思っていました。

そして「所沢のダイオキシン騒動」(※1)が起きます。誤ったニュースが大きく報道され、騒動は日々加熱、「産廃会社の焼却炉からダイオキシンが出ている!」「産廃会社は出て行け!」と、地域住民と環境保護団体から強いパッシングを受けました。

58
59

業界でもトップクラスになりました。離れたっていった顧客も「石坂産業なら」と少しずつ戻ってきてくれました。

消費活動について考える社会に

しかし、「一般の人に対する事業理解」で考えると、なかなかむずかしいものがありました。最終的にはゴミや私たちの役割を理解してもらいたい、という目標。でも、ゴミの分別はゴミ箱に入れたら終わり。工場に来てもらわないと、私たちは廃棄物を減量化することや、リサイクル率が98%を超えていることも知ってもらえない。

そもそも一般の消費者にとってゴミを処理する過程やコストなんて興味がないかわかりません。廃棄物というのがわかりづらいのであれば、まずは自分たちの消費活動について、環境教育を通して考えてみてもらうのはどうだろう。そう思いながら、不法投棄が繰り返されていた地域周辺の雑木林を借り受け「サステイナブルフィールド三富今昔村」(※2)をみなさんに楽

石坂典子
いしざかのりこ

石坂産業株式会社 代表取締役

1972年東京都生まれ。高校卒業後、米国の大学に短期留学。1992年に父親が創業した産業廃棄物処理会社・石坂産業株式会社に入社。埼玉県所沢市周辺のダイオキシン汚染の報道をきっかけに会社が誤解を受け、地域住民からパッシングを受けたことで「私が会社を変える」と一念発起。父親に直談判し、2002年に代表権のない「お試し社長」に就任する。焼却事業から完全撤退し、難易度の高いリサイクル事業へとシフト、環境に配慮した全天候型プラントを建設し、廃棄物の「減量化・再資源化率98%」を達成する。地域の里山の保全・再生にも尽力し、周辺の雑木林を借り受け「サステイナブルフィールド三富今昔村」を開業。2013年に代表取締役に就任。斬新なアイデアと行動力、豊かな感性で産業廃棄物処理業界を改革する経営に取り組む。日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2016」をはじめ、数々の賞を受賞。

みんなが出したゴミを処理しているのに、一方的な報道ひとつで反対、出て行けと言われるのは悲しすぎる。「知らない」ことが誤解を生む。廃棄物処理の本質を理解してもらうにはどうしたらいいのか。これからはみんなに知ってもらうための活動を我々は並行してやっていかなければならぬと思う。「社長をやりたい」と父に話しました。そこで私の全てのスタートです。

(※1)川越市・狭山市・二芳町との行政境にまたがる地域において、高濃度のダイオキシンが検出されたこと。報道にはじまったダイオキシン騒動。この地域に林立していた産廃会社の焼却炉から出る有害物質が原因と誤読され、その中でも大規模な敷地を保有していた石坂産業がパッシングを強く浴びた。石坂産業は報道の数年前からダイオキシン対策を施した焼却炉を使用していた。

4割の社員が退職した大改革

社長になってからは、悪戦苦闘。苦難の連続でした。「地域に理解され、愛される産廃業者になりたい」というその一心で

改革を行いました。15億円をかけて導入したばかりの焼却炉は廃炉にし、焼却事業からは撤退。建築物の解体現場から出た廃棄物の減量化・リサイクル化へと事業のメインをシフトしました。塵埃や騒音が外に漏れない屋内型のプラントを建設。見学通路を設け、屋内プラント内の作業の様子も全て地域の住民に開放しました。業界初の国際マネジメント規格(ISO)の取得。地域のゴミ拾い、近隣の不法投棄の片付け、社内教育と、本当にさまざまなことに取り組みました。元々荒っぽい男性が多い業界です。小うるさい女社長の改革に、最初の半年で4割の社員が退職しました。顧客に対して、処理料金の査定方法の改定と値上げ、搬入時のマナーなどを記したガイドブックの配布などを行いました。それが気に入らないと思った顧客は離れていきました。こうして苦しい取り組みを何年もかけて続けました。特に品質を徹底的に追求し、「ゴミにしない技術」を開発し続けてきた結果、廃棄物の「減量化・再資源化率」は98%以上を達成。

(※2)生物多様性の保全や回復の取り組みを評価するJN-PEP認証の最高ランクAAAに認定された。

環境と廃棄は私たちのライフスタイル

正しい選択とは何なのか

私は経営学も学んでいないし、ビジネススクールに通ったこともありません。国際規格のことを知ったのも入社してから。先代である父の「五感を大切にする経営学」と、さまざまな分野で活動する方々と交流することで学んできました。それらがミックスされて私なりのフレームワークができてきたと思います。社長になって15年。これまでたくさんの方の選択をしてきました。いろんな方がアドバイスをくれると、そういう時はやはり迷います。人によって考え方はさまざまで、正解というものはない。いい社会になってほしいと思って選択しても、自分たちの利益だけを考えると選択しても、どちらでも失敗することがあるわけです。じゃあ、自分の中の誠意って一体何だろうと考えた時に、やっぱり社会のことを考え

てやるべきことを選択したいと思う。たとえば会社が潰れてしまっても、やりきったという気持ちが残ればそれでいいのではない。Ozone（何をするか）ではなく、How（どうありたいか）という姿勢でいたい。結局は、自分にとって正しいか、正しいかないか。軸はずれさないでいきたいですね。仕事のことはつねに頭の中に。オンとオフの切り替えが大事だというのはわかっているのですが、そんなことは言っていられませんが。会社を経営すると、みなさんきつそうじゃないでしょうか。全てが勉強。いいと思ったらすぐに社員に話して共有します。考えて行動。考えて行動。この繰り返しです。

自分たちらしさが会社の価値に

「データがない」「実績がない」と人はすぐに言いますが、過去

に実例がないからやる価値があるわけです。すでに実例があれば、そこはブルーオーシャンでも何でもない。二番手ではない。二番手からスタートしたことは、なかなか独自のものにはなりません。もちろん、実績がなければ行動を起こすのは怖い。そういうことが世の中にはいっぱいありますよね。でも、改革する立場の人間は、失敗を恐れないことも必要ではないでしょうか。

社員の人たちによく言うのは、「私たちらしさって何だろう？」ということ。成長している会社を見ると羨ましくなるものですが、でも、同じやり方をそのまま採用する意味って何だろう？真似をするにしても、そこに私たちならではの工夫がほしい。どんな時にでも私たちらしさを大切にしたいのです。そこが会社の価値にもつながっています。ではないかと思っています。



満足してしまうことのリスク

さまざまなメディアにも取り上げていただき、「奇跡の企業再生」などと言っていたこともありますが。確かに以前に比べてたは会社は成長しました。ではこれで満足かという、まだまだ全然！

衰退につながるので、企業は持続的に成長しないといけません。でも、今は外向けの急速な拡大よりも、会社内部のゆるやかな成長の期間だと考えています。成長度合いの中で、また急

速に会社が成長するタイミングが必ずやってきます。この時に中身が追いついてないと崩れてしまう。社内保護やリスク回避のレベルがきちんと共有されていない、何を大切に私たちがやっている企業なのかということのポイントがずれてくると、いとも簡単に会社は崩壊します。拡大に向けた動きも並行しながら、今は内部の見直しに時間をかけています。

廃棄物処理への理解は環境問題に通じる

この15年間で、業界に対するイメージはかなり変わったと思います。他の会社もみなさんとも頑張ったと思います。だけど、二極化しているという面も

あります。私たちのように環境問題に配慮し、再生事業へとシフトし、猛烈に改革してきた会社と、従来の産廃業のイメージどおりに続けている会社と。これは結局、今でも両方に需要があるという点でもあります。残念ながら、消費者にもまだ産廃物処理への理解が深まっていない。

産廃物というのは生態系へとつながっていく、環境にとっても影響するものです。日本では、環境という別次元のようなイメージだけれど、環境も廃棄も私たちの重要なライフスタイルなのです。

大きな企業というのは社会を変えるような文化を作り出します。そういう企業を私は本当にすごいと思いますし、刺激を受けます。私たちは今後も、消費者に意識して選んでもらえるような業界に変えていけるように努力していきたい、そして新しい文化を作りたいと思っています。

（取材／2018年11月）

COMPANY PROFILE

石坂産業株式会社

1967年、先代の石坂好男氏が土砂処理業として創業。1982年に埼玉県入間郡三芳町に本社を移転。2002年、娘である石坂典子が代表権のない社長として就任。以降、難易度が高い建設系産業廃棄物のリサイクル事業に特化。「産業廃棄物を資源に変える！」をコンセプトに、地域の環境に配慮した全天候型独立総合プラントでの産業廃棄物の減量化・再資源化率98%を達成。地元の里山保全、再生に尽力し、2013年経済産業省の「おもてなし経営企業選」に選出。年間約4万人以上の見学者が訪れる。

Address 埼玉県入間郡三芳町上富 1589- 2

<https://ishizaka-group.co.jp>

